

京都大学教育研究振興財団助成事業
成 果 報 告 書

平成29年7月31日

公益財団法人京都大学教育研究振興財団
会 長 辻 井 昭 雄 様

所属部局・研究科 医学研究科

職 名・学 年 修士課程2年

氏 名 中 山 恭 章

| | | | |
|-------------|---|-----------|----------|
| 助成の種類 | 平成29年度 ・ 国際研究集会発表助成 | | |
| 研究集会名 | 第22回ヨーロッパスポーツ科学学会 22nd annual Congress of the EUROPEAN COLLEGE OF SPORT SCIENCE SPORT SCIENCE IN A METROPOLITAN AREA | | |
| 発表形式 | <input type="checkbox"/> 招待 ・ <input checked="" type="checkbox"/> 口頭 ・ <input type="checkbox"/> ポスター ・ <input type="checkbox"/> その他() | | |
| 発表題目 | Examination of relevance between transverse arch (TA) and injury of ankle or knee in college soccer players | | |
| 開催場所 | Messe Essen, Essen, Germany | | |
| 渡航期間 | 平成 29年 7月 3日 ~ 平成 29年 7月 10日 | | |
| 成果の概要 | タイトルは「成果の概要／報告者名」として、A4版2000字程度・和文で作成し、添付して下さい。「成果の概要」以外に添付する資料 <input checked="" type="checkbox"/> 無 <input type="checkbox"/> 有() | | |
| 会計報告 | 交付を受けた助成金額 | 300,000 円 | |
| | 使用した助成金額 | 300,000 円 | |
| | 返納すべき助成金額 | 0 円 | |
| | 助成金の使途内訳 | 飛行機代 | 120,000円 |
| | | ホテル代 | 50,000円 |
| | | 学会参加費 | 50,000円 |
| | | 学会登録費 | 10,000円 |
| 移動費(空港～学会場) | | 20,000円 | |
| | 滞在費 | 50,000円 | |
| 当財団の助成について | (今回の助成に対する感想、今後の助成に望むこと等お書き下さい。助成事業の参考にさせていただきます。) 今回は国際学会発表における助成金を頂き、ありがとうございました。今回は、学会参加費や渡航費も高く、宿泊費や食費を含めると、30万以上の支出でした。しかし、助成金のおかげで私費からの支出が最低限で済みました。誠にありがとうございました。 | | |

成 果 の 概 要

私は 22nd EUROPEAN COLLEGE OF SPORT SCENCE でオーラル発表を行った。英語が苦手であったため、出国する前から英語の勉強や話す練習を行い、英語に対する耐性をつけるところから始めた。研究室にいる留学生とも英語でのディスカッションを繰り返し徐々にではあるが、英語に慣れ学会を迎えることが出来た。

学会では、様々な国、バックグラウンドを持った方々が集まっていた。そのため、様々な視点から考えられた研究が多くあった。中でも私はサッカー選手に関する研究を行っているため、サッカー選手関連の研究を多く見学した。同じサッカー選手を対象にする研究でも、私は大学生でやっているのに対して、ヨーロッパで行われている大会のトップクラスの選手たちを対象とする研究や、ワールドカップを対象にしている研究もあり、非常に興味深かった。高いレベルで行われている研究の発表を実際に見ると、自分への刺激にもなり、より深い内容の研究を行いたい、という気持ちが芽生えた。また、発表者へ質問することで新たな視点を見つけられ、自分の研究への応用へつながると考えられる。そのため、私は積極的に質問するようにしていた。質問により、発表だけでは分からない研究の背景や考えが見えてきて、さらに興味深くなる研究もあった。

私は、傷害とサッカー選手の身体的特徴との関連性について発表を行った。発表に対して3つの質問があった。1つ目は、測定した項目についての測定方法の詳細を知りたいという質問。2つ目は、傷害の種類の内訳を聞かれ、さらに統計解析に対しての提案をしていただいた。3つ目は、傷害が利き脚で多いのか、非利き脚で多いのかという質問だった。1つ目と3つ目に関しては、研究室内でディスカッションをした際にも出ていた意見だったが、2つ目は、考えていなかった意見だった。確かに、今回の研究では研究計画の段階から甘かった部分の指摘だったため、今後の研究に活かせるものだった。研究室以外での自分の研究に対するディスカッションをする機会はなかなか無いのに加えて、よりレベルが高く臨床で活躍している方々の意見を頂けて、貴重な経験となった。発表のタイミングでは時間制限もあったため、質問は以上となったが、発表終了後にも何人か声をかけていただき、より内容の濃いディスカッションを行うことが出来た。また、発表内容からアジアで行われる他の学会へ紹介して頂いたり、と様々な収穫があった。

日本の学会へは行ったことがあったが、国際学会は初めてだったため、緊張が大きかった。しかし、英語自体に慣れてくると、発表されている研究は国内の学会よりも濃い内容で行われているものが多く、勉強になることが多くあった。内容一つとってもそうだが、測定方法においても違う方法でやることで信頼性の高いものになり、統計解析においてもより優先すべき方法で行っていて、発表の一つ一つが聞き逃せない情報だった。

今後の自分の研究における課題も見つけることが出来た。まずは研究計画の段階からより綿密に行うことが第一であると思った。当たり前のことではあるが、疎かにしてしまうと後々にずれが生じてしまうため、研究を行う上で一番重きを置かなければいけない部分だと感じた。また、研究結果における考察を考える時にも様々な視点からの考察を考慮しなければいけない。今までは、有意差の出た結果との関連しか見ていなかったですが、それ以外の関連する要素も考慮しなければいけない、と感じた。本研究であれば、観察研究であり、マクロな面で

見て研究であるが、よりミクロな面を見たバイオメカニクスの面からの考察も深められるとより良い研究になった、と考えられる。また、傷害との関連性を見るために、傷害を分類して統計解析を行う必要があった。この見解は国際学会で発表を行い、ECSS という多くのバックグラウンドを持つ方々が集まる学会で意見をもらうことで発見できたものである。

総じて今回の学会発表で自分が成長できたと感じる。研究に関してはもちろんのこと、英語に関しても、コミュニケーションに関しても今まで経験できなかった貴重な経験を積むことが出来た。今までどれだけ小さなコミュニティにいたかを気づくことが出来、さらに広い世界を見ることが出来たことは、今後の私自身に良い影響を及ぼすだろう。今回の学会のすべての経験を糧に、今後の研究や生活をより一層厚みのあるものにしていきたいと感じた。